

第1章 立志

ええ手をもろとる

代掻^{しろか}きをする田んぼにコイサギが群れていた。

牛は鋤^{すき}をひきながら湿田の土をねっている。なれたもので、農夫が鼻木につけたひもをかるく引くとむきをかえ、また黙々と鋤をひいた。

文久元年（一八六一）初夏、都は御一新^{ごいっしん}の夜明けをむかえようとしていたが、田舎の暮らしはまだのんびりしている。今年も、伊予の松山藩領味生^{みぶ}村ではいつもどおり田植えの準備がはじまっていた。

遠く浜辺までつづく村の水田には、夏空と白い雲がうつっている。

海のかおりをはこんでいた風がやみ、日が西の丘陵へさしかかったころだった。

常福寺^{じょうふくじ}の横手の田をすいていた喜惣次^{きそじ}が、

「ほれ、どうどう。ハナや、今日はあずらんと、よおやったわい」と牛をほめ、汗で光る黒い肩をたたきながらあぜ道へあげた。そのまま寺のわきをながれる小川へハナをつれてゆくと、

「お父^とう、お父^とう」

と土手にいた長次郎が喜惣次のあとをおいかけ、川にはいつてきた。数えで五歳になる長次郎には川は深く、まだ水はつめたい。

「風邪をひくぞ。あっちに行けや」

藁^{わら}のタワシで牛のからだを洗いながら、喜惣次は寺の境内をあごでさした。

常福寺は喜惣次の家の菩提寺で、境内のお百度石のまわりは近在の子どもたちの遊び場になっていた。あきらめきれない顔で、父をじっとみている長次郎に喜惣次は言いかけた。

「ちいと待っとれ。じきに寺から家^{うち}までハナに乗せてやるけんの」



「ほんまか、お父う」

「ああ、ウソはいわん。そやからみんなと遊んどれ」

と喜惣次はやさしい声で二男をうながした。

長次郎はなぜか牛の背にのるのが好きな子だった。癩がつよく気に入らないことがあると地面をころがりまわって泣き叫んだりするが、ハナの背にのせると、ころっと気分がかわり得意顔になる。

しばらくして、喜惣次はハナをつれ寺の山門をのぞいた。

石段の下にうずくまっていた長次郎は、喜惣次に気づいて立ち上がり、袖で目もとをぬぐった。

「どないしたんや」

泣いたあとがある丸い顔に夕日があたっている。

石段の上の境内のほうから子どもたちの喚声がする。

「悪たれにいびられたかや」

長次郎はうつむき、かぶりをふった。

喜惣次はしゃがむとやさしく息子の頬をなで、それからかたわらの楠をあおぎ見た。

「ほれ見とおみ。すがたのええ大木や。長次郎もこの楠のようにまっすぐ大きくなれ」

長次郎はこくんとうなずき、

「お父う…」

と父にからだをよせ、手をにぎってきかした。

喜惣次は顔いっぱい笑顔をかべ、ひよいと息子をだきあげるとハナの背にのせた。

家に着くと、母のウタと長女のタカ、それに数えで九歳になる長男の利平^{りへい}たちも桃畑から帰ってきたところだった。長次郎の下には二歳と当歳のふたりの妹がいたが、喜惣次の姉が家のなかの事をひきうけているので、みんなは安心して田畑へ出ることができる。

夕飯がすみ居間で家族がくつろいでいると、ウタが喜惣次に寺小屋の相談をした。味生村の百姓の子は九歳から十二歳ころまで、近くの寺小屋へ通うことになっていた。長女のタカはすでに郡内の三津浜町にある女子だけの寺子屋で家事裁縫と読み書きを習っている。田植えが終わり農作業もひと段落したら、こんどは利平に手習いと算盤を習わせたい、とウタがいった。利平は母のそばにすわり、喜惣次に頭をさげた。

「勉強は大事じゃけん、こつこつしんさい」

と喜惣次は就学をゆるし、はげました。

喜惣次の家は村で^{りしやう}里庄とよばれる庄屋格の自作農家である。

農繁期になると下男を何人もやとい、一町歩⁽¹⁾の田畑をたがやしていた。暮らしに多少のゆとりもある。城下に住む上士の家にはかなわないが、蔵には書籍もいくらか積んであり、喜惣次は学問への理解もあった。そこで喜惣次は利平を城下にある、小川塾という本格的な寺子屋にかよわせることにした。

喜惣次が^{かっけつ}咯血したのは、この日の夜半である。

たいした量ではなかったが、一昨年伊予国一円にコレラがまん延し、多数の人が死んでいた。ウタは夫がそのコレラという疫病にかかったのではないかと怖れた。さいわいコレラではなかったが、微熱がつづいて喜惣次は頬がこけ、日ごとに元気をなくし床からおきあがれなくなった。肺を病んでいたのである。

七月中旬、瀬戸内海を航行していたイギリスの蒸気船が潮にながされ、三津浜沖に^{いかり}錨をおろす出来事があった。

松山藩では異国船が近海にやってきた場合の手配を城下に示したばかりのときで、ちょっとした騒ぎになった。

手配通り、三津浜の番所からほら貝がふきならされた。危急をつげるその響きはただちに村々へ伝達されながら城下へとどいた。城下では^{かいしよ}会所⁽²⁾ごとに

太鼓と^{かね}鉦や小板木がうち鳴らされ、藩士と町民に不測の事態の襲来をしらせた。

一の手の手兵と軍馬が城山の麓へ勢ぞろいしたころ、異国船は商船で潮待ちのために停泊したことがわかり、だれもがほっと胸をなでおろした。

騒ぎがやむと、喜惣次は利平と長次郎をよび、蚊帳のなかから話しかけた。

「この先、世の中はどんどんかわる。算盤を勉強し、本を読め」

「算盤を勉強して、本を読んだら、お父うは元気になってくれるかや」

と寺子屋で学びはじめた利平がおうむ返しにたずねた。

「おう、ならい、ならい」

と喜惣次は応じたが、すぐに咳きこみ、ぜーえぜーえと上体をふるわせながら息をついだ。

夏の暑さがこたえたのか、喜惣次の容態はどんどん悪くなった。

秋口にはいると朝夕、見舞いの者が訪れるようになり、幼い長次郎も父が尋常ではないことを知った。

父にだかれ、牛の背にのる日はもう二度とこない。

寺の石段の下で父を待っていたとき、なぜか長次郎は父がどこかへ行ってし

もう不安におそわれて泣いたのだが、いまそのことが現実になろうとしていた。見舞客がきた夜、長次郎は布団のなかでしくしくと泣き寝入りをするようになった。見舞いの大人たちが父を遠くへつれ去って行くように思ったのだ。



稲刈りをおえた数日後、喜惣次の容態はいよいよあやしくなり、朝から医者やよばれ親戚や近所の村人たちが集まってきた。

姉のタカに手をひかれて病室へゆくと、大人たちが十重二十重に病人をかこんでいた。

かさなる背中の中からは、別人のような父をみた長次郎はわっと泣き声をあげた。タカにつれだされ、長次郎が居間でぐずっていると、近くに住む大三郎という若者が長次郎の前に腰をおろした。大三郎は漢籍に親しむインテリで、村役人をしている本家は藩から清水という姓をさずかっている。

「坊、なして、泣くんよ」

「いやじゃ、いやじゃ。お父うがおらんようになるう」

長次郎はいっそう泣きじゃくった。

「べらぼうめ。泣いたらいくまいが。坊が泣くとお父うは本当に死んでしまいうぞ」

と大三郎ははげしく叱責した。

長次郎はひくひく喉をふるわせながら訊いた。

「泣かなんだら、お父うの病気はなおるのか」

「ああ、坊が泣かなんだら、お父うは必ず元気にならう」

「なら、おいらはもう泣かん」

長次郎はびたっと泣きやみ、手で頬の涙をぬぐった。

このときから、長次郎は決して涙をこぼさなかった。

しかし、喜惣次の具合は日ごとに悪くなり、文久元年十月二十三日、大勢のひとたちに見守られて息をひきとった。家族はみな声をあげ泣きくずれたが、長次郎だけは泣くのを必死にこらえた。泣かなければ父が生き返ってくると思っていたのだ。もちろん、いくら泣くのをこらえても父が息をふきかえすことはなかった。

野辺送りがすみ、からっぽになった家にもどると、長次郎は布団にもぐりこんだ。幼心にも人の世の無常が身にしみた。一心に快癒^{かいゆ}(3)を念じても、人は病に伏したまま寿命がつきて死ぬ。自分を慈^{いつく}しんでくれた人との別れも、決してさけることができないのであった。

初七日がすぎると庄屋と親族が内談し、三十二歳で後家になったウタをかこんだ。ウタのもとに五人の子どもたちが遺^{のこ}されている。

庄屋と親族は一家の身のふりかたをウタに勧告した。

田畑を小作人にまかせて農作をやめ、年長のタカと二男の長次郎は里子にだす。ウタは長男の利平と下の二人の女子をひきとって家をたたみ、親族の部屋を借りて質素に暮らせば、利平が大人になるまで家産を減らさずにすむ。されどもし里子にだすのが不憫^{ふびん}だというのなら、親族から婿をむかえて新たに一家をなし、農作をつづけたらよい。

悲嘆にくれていたウタは顔をあげ、毅然^{きぜん}としていった。

「だれひとりとして、里子にだす気はありません」

「ウタさんや、情にまけたらいくまいが。気持ちはよう分かるが、ここは子どもの将来を考えてやらにゃ」

とすぐ親族代表がさとした。

ウタは瞳をあげ、気配をおしかえすように、

「あたしは、この家を守るために嫁いできとります」

というと、取り囲んだ男たちをみまわした。

「子どもを守り大きくするのがあたしの一番の務^{つと}めですらい。これからは母親にも父親にもなり、主人が遺してくれた子を素直に育てていく覚悟ですから、どうかよろしゅう見守ってくださいや」

と自分の考えをつたえ、みんなに頭をさげた。

「いまは気がはつとるからそんな殊勝な口をきくが、若い後家が女手ひとつでこの屋敷をしきるのはこたえんぜ」

「家を守るためなら、どんな苦勞もいといません」

「ほう、こりゃまた若いのに、がい(強情)なことよ」

代表は苦^{にが}りきった顔になった。

それで庄屋が婿をとることをしきりにすすめたが、ウタは二夫^{にふ}にまみえることはできない、と断った。

親族の手助けがあったものの、三十路^{みそじ}をこえたばかりの女が農家をきりまわすのは大変な苦勞である。農作業はなんとかしのげたものの、若い後家を誘惑し婿入りすることを目当てに下男になった村の若者が、夜になっても帰ろうとしないことにウタは悩まされた。仮眠をよそおって若者がぐずぐずと作業場にいる間、ウタは臼^{うす}に米をいれて搗^つき、若者があきらめて帰ってゆくのを待つて、床につく。そんな日が何日もつづくとうたは目のしたに大きな隈^{くま}をつくったが、いっさい隙をみせることはなかった。

喜惣次の死後、時代ははげしく動きだしていた。

文久二年（一八六二）にはいると、京都の情勢がはなはだ不穩になり、地方にもその余波がおしよせてきた。

松山藩でも百姓たちをとりたてて編成した八百人ほどの洋式銃隊が藩の新制大隊として正式に発足し、元治一年（一八六四）二月に京都を警備するため上京した。

七月に禁門の変⁽⁴⁾がおきた。

長州藩兵の京都侵入をふせぐ目的で、三条通紙屋川辺りの警備を担当していた松山藩兵は、御所近辺で戦いがはじまると、山崎への移動を命じられ夜を徹して行軍したが、大砲の台車が故障して動けなくなり、ついに戦闘には間に合わなかった。

おかげで死者はださなかったが、京都の情勢の急変は早飛脚で松山の国元へ伝えられた。藩では道後温泉へよそ者がはいることを差し止め、海岸の見張り番と巡回の強化、通行人の調査など治安を強化するためのお触れをだしたので、領内の村々の緊張と不安はにわかになら高まっていった。

十一月にはいって間もない日だった。

八歳になる長次郎は早朝から萱^{かや}山で、秋刈りをしたまぐさを積み重ね、くろ

(塚)をつくる手伝いをしていた。まぐさ場の高台からは藁^{わら}ぐろがならぶ村の

田んぼが一望できる。朝から空が高く、田畑のなかをぬける街道を行き交う人や牛馬が見渡せた。街道は三津浜からうねうねと迂回しながら味生村をぬけ、城下へとつづいている。

昼ちかくになって、その城下のほうからぞろぞろと兵列があらわれた。噂に聞く^{しんあしがる}新足軽の洋式銃隊で、藩兵は尻のわれた羽織に大小の刀をさしたまま筒(ゲベル銃)をもって行進している。長次郎は手を休め、ながながとつづく隊列をみつめて立ちつくした。

街道の異変に気づいたウタが小走りに長次郎のそばにやってきて、頬かむりをとると土の上にぺたんと正坐した。

「お母^かあ、あの兵隊さんらはどこへいくぞな」

「海をわたって、長州をこらしめにいきんさる」

「長州はなにか悪いことをしたのか」

「御公儀^{ごこうぎ} (5) にたてついたら」

「なしてたてついたら？」

とたずねる長次郎の袖をウタはひき、坐るようにながした。

遠くの隊列をながめながらウタは傍らの息子をさとした。

「なしてもこしても御公儀にたてついたらいくまいが。御公儀のおかげで、お殿様はこの国を治めておられる。味生村のみんながこうして暮らせるのも御公儀とお殿様のおかげやからの」

これまで公儀や殿様を口にだすと、だまってウタのいうことをきいていた長次郎が、はじめて聞き返した。

「おかげやいうが、お母あはお殿様をみたことはあるんか」

「おとろしや。百姓なんかがお目通しできるもんかや。そいでもお殿様はみんなのことをちゃんと知っとらいな」

「会わんでもか」

「そりゃそうや。この国はみんなお殿様のものやからなあし」

「田んぼも畑も山も川もか」

と長次郎は目にはいるものをつぎつぎにあげた。

「そうや、あたしら百姓も町人もあの兵隊さんたちもな」

「それはだれが決めたんや」

「だれもかれもあるものか。この国がはじまった遠い昔にお^{てんとうさま}天道様が決めな



さったことや」

とウタは当然のここのように^{こた}応えたが、街道から視線をはずし、感心したような目を長次郎にむけた。

長次郎は納得できず、ぷうっと頬をふくらませている。

「お前は考えるのが好きな子やな。寺子屋で勉強するようになったら、いっぱい本を読んでお母あに教えておくれ」

「うん。そうする」

と長次郎は大きな声をだした。

この日は姉妹と畑へ出ていた利平は春に寺小屋を卒業していた。来年は長次郎が寺子屋で学ぶ番である。

喜惣次の希望もあって利平が通学することにした小川塾は、士分の子弟も学ぶ漢学塾であったため、勉強が好きではない利平には苦痛だったようだ。利平は家の手伝いを言いわけにして、塾をよく休んでいたが家の跡取りとしての自覚はつよく、その分よく働いた。ウタは長次郎が利平とちがって物分かりがはやく、字を書いたり読んだりするのが好きなことは知っていたが、父親がいない今、小川塾へ通わせるのは無理であった。そこでウタは、長次郎を三津浜にある清楽院という寺子屋へ通わせることにしていた。清楽院は領内にある寺子屋としては比較的規模が大きく、六十人ほどの庶民の子女が学んでいる。

突然、長次郎が声をはずませ立ちあがった。

「お母あ、みてみる、あれはお殿様ではないのか」

新足軽のあとにつづく^{よろいかぶと}鎧兜を身につけた家臣団のなかに、緑色の陣羽織を着て馬に乗って進軍するサムライがいた。陣笠からつきでた金色の角が日差しをうけ光っている。

「おおこわ。長次郎、立ったらいけん。坐れ坐れ！」

ウタが腕をつかもうとすると、長次郎はすばやく身をかわし、木蔭にかくれて浅黒い顔だけのぞかせた。遠くはなれているから、むこうからまぐさ場の百姓の母子に気づくことはないのだが、ウタは正坐したまま上体をまるめ、家臣団の行列が街道に砂煙をのこしてすぎ去るまで頭をさげていた。

このとき、長次郎が目にしたのは第一次長州征伐にむかう松山藩の軍勢である。藩主の^{まつだいらかつしげ}松平勝成は三津浜から船で瀬戸内海に浮かぶ中島へわたって陣をはり、新足軽の銃隊をさらに長州との境界ぞいの津和地島に進軍させ、長州領内に攻め込もうとしていた。

いっぽう内紛のつづいていた長州藩では幕府への恭順⁽⁶⁾を主張する俗論派が

政権をとり、禁門の変の責任者を処罰した。そこで幕府は俗論派の降伏要求を受け入れて長州征伐を中止し、年もおしせまった十二月二十七日、征長総督徳

川^{よしかつ}慶勝は出兵した各藩に陣払いを命じたので、松山藩兵は一戦も交えることなく順次、城下へひきあげてきた。

いくさがなかったことで領民はみんな胸をなでおろした。

ところが年があけた慶応一年（一八六五）一月、長州藩では奇兵隊をひきいる高杉晋作らが実権をにぎり、幕府との約束をまもらなくなった。幕府は「長州藩において、容易ならざる企てがある」という漠然とした理由で、諸藩にたいして長州への再出兵を命じた。松山藩へ再征の通知がとどいたのは四月二十五日である。領内は出兵にそなえた準備がはじまったが、この年はまだめぼしい動きはなかった。

四月初旬、長次郎は三津浜の清楽院で学びはじめる。

入門に際し、包み金を持参した父母が子どもに付添い、師匠とお目見えの礼式をおこなうきまりになっていたが、付添い人のいない長次郎は自ら包み金を持参し、ひとりで師匠と会い、けなげに挨拶の口上をのべた。心細い思いよりも、学べるよろこびのほうがずっと大きかった。

清楽院の教科は、初歩が手習いと素読、それに算盤である。

ひとつおりの初歩をおえると、「松山往来」、「伊予風土往来」、「松山藩商家往来」など藩内で独自に編纂された教科書と、「数学」、「女大学」、「農事往来」、「唐詩選」など全国でつかわれている教本で勉強することになる。

授業の内容は、一日の内の三分が教授、あとの七分は教わったことを自ら稽古（復習）することに費やされた。この稽古のあいだの半分は謡曲の授業のときもあったが、ほとんどが読書と手習いである。寺子は一日中、静かに座っていなければならないので、たいていの子は苦痛を感じて、稽古の時間にさわぎだす。ふざけたりいたずらをしたりで教場がさわがしくなりはじめると、師匠は線香を焼いて、

「みんな無言ぞな一」

と叱り、煙がたちのぼる間、静寂を保つように要求する。

それでも喧噪^{けんそう}がやまないときもある。罰則をもうけて稽古に専念させるようにしていたが、いうことをきかない子を別室に留置したり、さらには破門を命じるときもある。

ただしこの破門は訓育のひとつである。破門された寺子が机を背中にかついで表に出ると、そこには師匠の内儀^{おかみ}が待っている。内儀は大仰な表情で破門を

嘆いてみせ、破門された寺子の母親代わりになって師匠のところへゆき、詫びをいれ許しを請う。そして最後は師匠とふたりで寺子を戒め、教場へ帰すことになっていた。

長次郎は決して秀才ではなかったが、向学心ではだれにも負けなかった。稽古のときは人一倍熱心に机にむかい、家に帰っても習ったことを復習した。しかし戸主の役割をになうことになった兄の利平は、勉強にいそしむ弟をすんなり受け入れるほど大人ではない。本を読んでいる長次郎をみつけると不機嫌になり、本を取り上げ、仕事をいいつけた。

蓆を織ったり、わらや竹を編んで籠をつくったり、さらに足袋や紙入れをぬうなど日が暮れたあとでも菜種油の灯のしたで、できる仕事はいくらでもあった。長次郎は技巧が必要なこうした仕事で得意で、すぐにコツを覚え利平に負けなくらい上手に仕上げることができた。

年の瀬には家族総出で障子の和紙の張り替えをした。

四隅までまったく紙のたるみのない仕上りの障子にウタが目をほそめた。長次郎の両手を取り、

「おまえはお父うから、ええ手をもろとる。大事にしいや」といとおしそうになでた。



- (1) 1町は、1ヘクタール。一辺が100mの正方形と同じ広さ。面積にして $100\text{m} \times 100\text{m} = 10,000\text{ m}^2$ (3,000坪)。1町の土地からは10石強の米がとれる。米10石は重さにして $1,500\text{ kg} = 1\text{ t } 500\text{ kg}$ 。
- (2) 人の集会する所。
- (3) 病気・傷などがすっかり治ること。全快。
- (4) 京都で起きた武力衝突事件。蛤御門の変 (はまぐりごもんのへん)、元治の変とも呼ばれる。

- (5) 朝廷や幕府を敬い、はばかりという語。
- (6) 謹んで命令に従うこと。
- (7) 江戸時代後期、長州藩内は改革派と保守派とに分かれており、同じ藩主もうりたかちか毛利敬親の下で二つの派閥が主導権を争っていた。のちに改革派は正義派と称するようになり、幕府に恭順しようとする保守派を俗論派と呼んで区別した。正義派・俗論派の命名者は高杉晋作。